

新 知 故 温

静岡県立中央図書館所蔵の貴重書紹介 (67) 平成 15 年 3 月 15 日

新井白石シリーズ

蘭学の出発点・新井白石の『西洋紀聞』(Q293-2)

新井白石(明暦3(1657)年~享保10(1715)年)は、6代将軍家宜、7代将軍家継を補佐した儒学者です。彼の思想は、江戸時代の実学者と蘭学者に強い影響を与えました。日本の精神をもとに西洋の知識技術を活用しようという和魂洋才を基礎とする開国論者と西洋文化を排斥する水戸学そののうじょういの尊皇攘夷論者の相反する幕末の思想の出発点ともなっています。明治時代になると福沢諭吉・森鷗外もりおうがいなどの著名な文化人達や政界人にも影響を与えました。明治中央政府に期待された初代静岡県知事関口隆吉せきぐちたかよしは青年期に、尊皇攘夷思想の大家藤田幽谷・会沢正志斎あいざわせいしさいに強い刺激を受けています。関口隆吉の蔵書コレクションは、その後当館に寄贈され、久能文庫と命名されました。久能文庫には、新井白石の著作9タイトルを含んでいます。

新井白石は、宝永5(1708)年にキリスト教の伝道の再開のために屋久島へ潜入したイタリア宣教使ジョヴァンニ・パッティスタ・シドチに対し、宝永6(1709)年11・12月に4回にわたる取調を行いました。シドチからの情報にオランダ商館長コルネリス・ラルダインから得た情報を増補・整理して、白石は『西洋紀聞』、『采覧異言』さいらんいげんを記しました。『西洋紀聞』はキリスト教に触れているため、白石の遺志により新井家秘蔵とされましたが、寛政5(1793)年に西洋諸国への政策についての議論に役立つため『西洋紀聞』の写本を幕府に提出するように命じられました。明治時代になり初めて刊行され、当館所蔵資料は明治15(1882)年に刊行されたものです。

『西洋紀聞』は上巻でシドチ潜入と取り調べの記事、中巻ではヨーロッパ・アメリカ・アジア・アフリカの政治・風俗・地理・物産等についての詳しい情報とスペイン継承戦争(1701~14)等の国際戦争や世界情勢経過の詳細な記事、下巻ではキリシタン関係記事が記されています。白石とシドチは、取り調べる者と調べられる者の関係でありながら、互いに知識・人格等を評価しあっていました。しかし、白石にとってキリスト教の教義を説く時のシドチは異常者扱いしています。さらに「(西洋の学問は)所謂形而下なるもののみ知りて、形而上なるものは、いまだあづかり聞かず。」と表現され、西洋の技術文化のみを評価しており、後の日本の西洋文化導入の際の和魂洋才的態度の基になりました。「デウス、また何ものの造るによりて」とシドチの説く創造主は何ものが作ったのかと合理主義的批判を加え、さらにシドチの言う「人間の平等」が儒教道德五倫(君臣・父子・夫婦・長幼・朋友)という社会秩序を破壊するとして、徹底的に批判しています。

今日、新井白石は日本史を専攻する外国人研究者の興味を引きつけています。それは『西洋紀聞』が、捕らわれた宣教師から得た情報により、西洋文化を客観的に評価しており、一般的な征服者の文化という主観的論旨になっていないためです。

【参考資料】

『新井白石の現代的考察』(289.1/77-9)

『新井白石の洋学と海外知識』(402.1/11)

『洋学史研究序説』(402.1/24)